

森 鷗外 『安井夫人』 関係文献と情報 一覧

日 高 貢 一 郎

“Yasui fujin” (Mrs. Yasui) by Mori Ohgai and  
related publications and papers

HIDAKA, Koichiro

大分大学教育福祉科学部研究紀要 第35巻第1号

2013年4月 別刷

Reprinted From

THE RESEARCH BULLETIN OF THE FACULTY OF

EDUCATION AND WELFARE SCIENCE,

OITA UNIVERSITY

Vol. 35, No. 1, April 2013

OITA, JAPAN

## 森 鷗外『安井夫人』関係文献と情報 一覧

日 高 貢 一 郎\*

【要 旨】 『安井夫人』は、森 鷗外の歴史小説の 7 作目。女性を主人公にした初めての作品で大正 3 年に発表された。初出誌やそれが収められた全集や文庫本などをあげ、またこの小説について考察した論考や関連の情報などを知り得た限りリストアップして、今後いっそう研究の発展・深化をはかるための基礎資料となることをめざしたい。

【キーワード】 森 鷗外 『安井夫人』 刊行書目 論考 関連情報

### は じ め に

森 鷗外の小説『安井夫人』は、当時幅広い層に読まれていた総合雑誌『太陽』（東京博文館発行）（注 1）大正 3 年（1914 年）4 月号に掲載された短編で、鷗外の歴史小説としては 7 作目、女性を主人公にした初めての作品である。鷗外 52 歳のときの執筆であった。

鷗外は翌大正 4 年 1 月に「歴史其儘と歴史離れ」を書いて、自らの歴史小説執筆の方法・手法についての考え方や心境の変化などを述べているが、近代文学研究者の間では、『安井夫人』は「歴史そのまま」（史伝など、史実に忠実な作品）と「歴史離れ」（歴史に素材を求めながらも、自由な創作を加えて書いた作品）の両方の性格を合わせ持っていると見られており、鷗外の創作活動と作品全体を研究していく上で、注目すべき作品だと考えられている。

評論家の唐木順三はその著『鷗外の世界』の中で、「僕は『安井夫人』を以て、先の『護持院ヶ原の敵討』、後の『渋江抽斎』と共に鷗外最高級の作品と思ふ」と述べている。

この稿では、以下、まず

1. 『安井夫人』の書かれた経緯や初出誌、その単行本化 について見たあと、
  2. 『安井夫人』が収録された全集類や文庫本などを挙げ、 次いで
  3. 『安井夫人』についての考察や分析をした研究論文や、 さらに
  4. この作品に言及している本や関連情報をリストアップし、 最後に
  5. 息軒夫妻の出身地である宮崎県清武町での関連する事柄 について、
- 私が知り得た情報を網羅し、『安井夫人』をめぐるできるだけ多様な情報を挙げていきたい。

---

平成 24 年 10 月 31 日受理

\*ひだか・こういちろう 大分大学教育福祉科学部 国語学研究室（国語学）

そうすれば、この作品について関心を持つ人たちのための「関係文献目録」として活用でき、またさらにより多面的な角度や観点から考察しようとする際に、ぜひ踏まえるべき先行文献や、参考となる情報の存在を知る手掛かりと手引きになることが期待される。

言い換えれば、『安井夫人』に関する文献や情報をできるだけたくさん収集して分類・整理し、今後いっそう研究を推進するための礎石になることを期するものである。

## 1. 森 鷗外と『安井夫人』

### 〔1〕 森 鷗外

鷗外は、陸軍の軍医として勤務し最高位の陸軍軍医総監・陸軍省医務局長に上りつめる傍ら、作家としても小説・翻訳・戯曲・評論など非常に多くの業績を残して類まれな人生を送った。

私生活においては 27 歳のときに最初の妻・赤松登志子と結婚して 1 児をもうけたが、折り合いが悪く 28 歳のときに離婚。後に 40 歳で荒木志げと再婚し 2 男 2 女に恵まれ、よき父親として子供たちからも敬愛されているが、伴侶のことではいろいろ苦勞したと言われている。

そういう自身の体験からも、安井夫人=お佐代さんは学問ひとすじに生きた夫=息軒に仕えて労苦をいとわず、無償の愛を貫いた女性として心引かれる存在だったという（注2）。もちろん学者としての息軒その人にも関心を持っていたことが知られている。

### 〔2〕 『安井夫人』

【初出誌】 小説『安井夫人』が最初に発表されたのは、上述のように大正 3 年(1914 年)、雑誌『太陽』の 4 月号(第 20 卷 4 号)で、その文芸作品特集「春期大附録」に収められた文学作品 5 編のうちの一つとして、「森 林太郎」の名で掲載されている。

【執筆の動機と経緯】 鷗外は、前々から、学者としての安井息軒に関心を持っていたが、宮崎県で刊行された『安井息軒先生』（若山甲蔵、大正 2 年 12 月、蔵六書房）を読んですぐに執筆に取り掛かったと思われる。鷗外の日記によると、大正 3 年 2 月 16 日に「鈴木徳太郎来て太陽に寄稿せんことを求む」とあり、3 月 1 日には「駒込龍光寺と養源寺とにある安井衡一族の墓に詣づ」とあり、4 日には「安井小太郎に書を送る。佐代子の事を問ふなり」、7 日には「安井夫人を書き畢る。高輪東禅寺に往きて、安井佐代、登梅、歌三女の墓を払ふ。寺僧はかかる人達の墓あることを全く知らざりしなり」（注3）と書き、翌 8 日には「鈴木徳太郎に安井夫人の稿をわたす」、さらに同 13 日には「安井夫人を校し畢り、原稿を安井小太郎に贈る」とあって（注4）、この作品の依頼を受けてから『太陽』に載るまでの経緯を知ることができる。

以上のように、執筆にあたって、また脱稿後にもすぐに安井息軒・佐代などが眠るお寺に詣でているが、多忙な中でのこういった行動からも、その傾倒ぶりが伝わってくる。

なお、原稿の冒頭部は、昭和 12 年 10 月発行(岩波書店)の『鷗外全集』著作編 第 5 卷 附録「鷗外研究」第 16 号に、冒頭から第 3 段落の「…行き逢ふ人」までの写真が載せてあるが、その後、原稿の行方がどうなったのか、現在はわからなくなっているという。

【佐代の死去と鷗外の誕生】 発表された年=大正 3 年を基準にして数えると、お佐代さんが 51 歳で亡くなった文久 2 年(1862 年)からは 52 年後、明治 9 年(1877 年)の息軒の没後からは 37 年が経った時点で、鷗外はこの作品を書いたことになる。

文久 2 年はまた、奇しくも鷗外その人が生まれた年でもあった。お佐代さんの亡くなったのが 1 月 4 日、鷗外の誕生はその半月後の 1 月 19 日だった。不思議な偶合というべきか。

【あらすじ】 さて、では『安井夫人』とはどういう作品であったか。

稲垣達郎編『森鷗外必携』(学燈社、昭和43年)の中で、主要作品126編の内容やあらすじを簡潔にまとめた「森鷗外作品事典」では、次のように紹介している。

「息軒安井仲平は、日向国清武村に住む飮肥藩の藩校教授安井滄洲の二男で背の低い醜男だったが、これにめげず、大阪、江戸に出て修学、藩主の侍読となった。父は彼のよめとりに苦心したが、仲平の従妹で快活な豊に拒絶され、かえって「控目で無口な」豊の妹佐代がみずから申し出て仲平の妻となった。佐代は「美しくて、しかもきっぱりした」あつぱれな学者夫人となって仲平に献身的につかえ、五十一歳で亡くなった。みごとな賢夫人であった。手法は前半が描写的、後半は記述的で、作品としていささか不安定の感をまぬがれない」と、作品の性格にまで言及している。

同様に、竹盛天雄編『森鷗外必携』(学燈社、平成元年)の「森鷗外作品事典」では、

「息軒こと安井仲平は、少年の頃ほうそうのため大あばたになって片目を失い、背が低く色黒の醜男だったので、婚期を迎えたとき、父の滄洲翁は苦勞した。まず親戚の、おきゃんな姉嬢に申し入れたところ、断られてしまう。ところが、美しく大人しい妹嬢佐代の方が、自分から嫁ぎたいと申し出た。佐代は、繭を破って出た蛾のように、「天晴地歩を占めた夫人」として息軒を支え、天下の大儒として活躍させる。そして、質素な生活のうちに五一歳で亡くなった。鷗外の筆は、佐代を描くときに歴史離れの自由さをみせ、息軒とその時代を描くにあたっては、歴史其儘に縛られている。そこに歴史小説の方法的ユレと二面性をみることができよう」と、方法論にも触れている。

息軒は、後年、幕府の学問所・昌平黌の教授に登用される。朱子学中心の同校にあって古学派・考証学者の息軒の抜擢は異例のことで、お佐代さんが亡くなって半年以後のことだった。

息軒夫婦には二男四女の子供が生まれているが、いずれも幼時に、あるいは若くして亡くなり、天寿を全うしたと言えるのは長女の須磨子だけであり、その子が先の安井小太郎である。

【全体の構成】 作品は大きく11の章段からなり、物語が終わった後には漢文体で書かれた「附録」があって、「一、事実」として明和4年(1767年)に父・滄洲が生まれてから、明治9年(1876年)9月23日に息軒が亡くなって駒込の養源寺に葬られるまでの109年間の事跡が、また「二、東京並其附近遺蹟」として、息軒一族の逝去年月日や享年、それぞれが眠る寺院などについての一覧が挙げられている(注5)。

【原典と作品と】 鷗外は先述のように『安井息軒先生』に触発されてこの作品を書いたが、原典284ページ中、佐代夫人について触れているのは「夫人の逝去」と題した7ページほどの章に過ぎず(注6)、またそれに基づきながら鷗外の自由な創作を加えて成った『安井夫人』も「佐代に関する記述は全285行中98行である」という指摘がある(注7)。

いずれも夫人に言及する分量の少なさについての指摘だが、それにもかかわらず『安井夫人』と題されるほどの強い印象を残す。これを巡って、またこの作品の小説としての出来や評価について、後掲の研究論文などでの研究者の意見や見解はいろいろに分かれている。

【単行本化】 初出誌が出て半年後の大正3年10月、鈴木三重吉編「現代名作集 第二編」として、鷗外の歴史小説の6作目『堺事件』(同同年大正3年2月に『新小説』に発表)と併せて文庫版サイズの小型の単行本とし、『堺事件』という題名で刊行されている。装画:津田青楓。

その間の経緯について、鷗外の記事によると、大正3年9月10日に「夜鈴木三重吉来話す。鈴木叢書に載するために堺事件、安井夫人の二編を交付す」とあり、10月5日に「堺事件、

安井夫人の縮刷を校し畢る」とある。本の発行は、大正3年10月23日（奥付）。

なお、初出誌『太陽』とこの単行本との校合については、後述の[11]『鷗外全集』（岩波書店、昭和48年）第15巻巻末にある対校が詳しく、上述の原稿冒頭部の写真との異同にも言及する。

以後、各社の文学全集などで『安井夫人』が収録される場合、この単行本がほぼ定本(底本)としての役割を果たしている。

## 2. 『安井夫人』が収録された本

次に、『安井夫人』が収録されている鷗外の全集や選集、各社の近代文学全集、文庫本などを挙げていく。以下、グループ別に、発行年順にナンバーを打って並べる。

【解説・解題】 作品をより深く理解し味わう上で、巻末に付けられている「解説」や「解題」は手引きとなり参考になる。各本の解説者についてもわかる限り記しておこう。

【注・注釈】 また、「注」の詳しさも作品を味読する上では助けになる。が、どの語や表現にどの程度の、どのぐらいの数の注を付けるかも、編集側ではスペースの制約とのせめぎ合いもあって悩むところだろう。豊富なものからまったくないものまで、実態は多様である。(注8)

【ルビなど】 難しい語や漢字の読みも、どう発音すればいいのか迷って決められないと読んでいて落ち着かない気分になる。が、ルビがあるとスムーズに読み進めていくことができる。

特に後で述べる「朗読」の場合などは、いちいちの語について発音(読み)を決めていく必要があるが、複数の収録本を見ていくとそれぞれに異なっていて、悩ましい(注9)。

その当時は特にルビがなくてもよかった語でも、時代が変わると馴染みがなくなり読めなくなることもある。編集に当たっては各社の編集方針に従ってルビにも加除があったり、文字表記にしても旧字体の漢字を新字体にしたりすることが多いし、仮名遣いを「現代仮名遣い」に変えたり、送り仮名を現行の規則に揃えたりなどという作業が加えられていることもある。

また意味や理解には特に影響はしないが、例えば冒頭の「日向国宮崎郡清武村…」も、「宮崎ごおり」としたもの、「宮崎ぐん」としたもの、ルビなしのもの、まちまちである。「清武村」も「そん」か「むら」か…。宮崎県では市町村名の場合、現在は「〇〇そん」と読む習慣があるが、当時ははたしてどうだったのか…。「三棟」も「みむね」か「さんむね」か…。

お佐代さんの実家の名字「川添」も、ルビは「かわぞえ」と濁って付いているが、地元では「かわそえ」と清音で言うのが一般的だといった問題もある。

【ミス】 作品のはじめのほうの「土佐堀三丁目の蔵屋敷に著いて、…」は、江戸期には土佐堀は一・二丁目しかなく、飢肥藩蔵屋敷は実際には一丁目にあったのだという(注10)。同じく「(仲平は)去年江戸から藩主の供をして帰った」も事實は「今年」とあるべきだったり…といった違いもある。これも「朗読」の場合など、どうすべきか対応が難しい。

～・～・～・～

《全集・選集類》 全巻が鷗外の作品のみを集めた全集や選集などは、次のとおり。

- |     |           |                 |  |          |
|-----|-----------|-----------------|--|----------|
| [1] | 『鷗外全集』第4巻 | 巻末に「編纂者の辞」小嶋政二郎 | 鷗外全集刊行会                                    | 大正12年1月  |
| [2] | 『鷗外全集』第4巻 | 創作戯曲編・創作小説編 上   | 鷗外全集刊行会                                    | 昭和4年9月   |
| [3] | 『鷗外全集』著作編 | 第5巻             | 岩波書店                                       | 昭和12年10月 |
|     |           |                 | * 附録の月報「鷗外研究」第16号の藤森成吉「鷗外の歴史小説」に原稿冒頭の写真あり。 |          |
| [4] | 『鷗外選集』第7巻 | 解説：斎藤茂吉         | 東京堂出版                                      | 昭和24年6月  |

- ⑤『森鷗外作品集』第4巻 解説：中野好夫 創元社 昭和26年 1月
- ⑥『鷗外全集』著作編 第6巻 岩波書店 昭和26年11月
- ⑦『鷗外小説全集』第8巻 森於菟・小堀杏奴編 宝文館 昭和32年 6月
- ⑧『森鷗外全集』3 解説 吉田精一 筑摩書房 昭和37年 4月  
\* 巻末に「天保五年分間江戸大絵図」と「天保八年大阪図」の折り込み地図あり。  
『安井夫人』関係は江戸13地点と大阪1地点。後の⑩も同じ。
- ⑨『森鷗外作品集』第5巻 昭和出版社 昭和40年 3月
- ⑩『筑摩全集類聚 森鷗外全集』3 解説：吉田精一 筑摩書房 昭和46年 6月
- ⑪『鷗外全集』第15巻「大鹽平八郎 稲妻 尼 塚事件 曾我兄弟 舞踏 謎 安井夫人ほか」  
（「後記」があるが執筆者の記名なし） 岩波書店 昭和48年 1月
- ⑫『鷗外選集』第5巻「高瀬舟 他」 解説：小堀桂一郎 岩波書店 昭和54年 3月
- ⑬『鷗外全集』第15巻 木下杢太郎ほか編 岩波書店 昭和63年 2月
- ⑭『鷗外歴史文学集』第3巻 解題：須田喜代次 岩波書店 平成11年11月  
《文学全集の中で》 日本文学全集などのうち「森鷗外集」の1編として採録されたもの。
- ①『新選森鷗外集』 改造社 昭和 3年10月
- ②『森鷗外集』下巻 監修：石川 淳 新潮社 昭和26年 1月
- ③『森鷗外小説集』第2（歴史編） 春歩堂 昭和31年 8月
- ④現代日本文学全集 55『森鷗外集』（二）解説：唐木順三 筑摩書房 昭和31年10月
- ⑤近代日本文学読本『森鷗外読本』その生涯と作品 唐木順三編 学習研究社 昭和34年 5月
- ⑥愛蔵版 現代日本文学全集 13 『森鷗外集』（二） 筑摩書房 昭和36年11月
- ⑦日本現代文学全集 講談社版 7『森鷗外集』伊藤 整ほか 講談社 昭和37年 1月
- ⑧現代文学大系 4 『森鷗外集』 「人と文学」：唐木順三 筑摩書房 昭和39年10月
- ⑨日本の文学 3 『森鷗外』（二）谷崎潤一郎ほか編 中央公論社 昭和42年 2月
- ⑩日本文学全集 6 『森鷗外集』 解説：吉田精一 河出書房 昭和43年 2月
- ⑪豪華版 日本現代文学全集 1『森 鷗外集』 講談社 昭和44年 1月
- ⑫カラー版日本文学全集 7『森鷗外』 解説：稲垣達郎 河出書房新社 昭和44年 3月
- ⑬日本文学全集 4『森 鷗外集』 筑摩書房 昭和45年11月
- ⑭現代日本文学大系 8 『森鷗外集』二 筑摩書房 昭和46年 4月
- ⑮新潮日本文学 1『森鷗外集』 解説：福永武彦 新潮社 昭和46年 8月
- ⑯日本の文学 3 『森 鷗外』 アイボリーボックス 中央公論社 昭和47年10月
- ⑰『日本近代文学』 岡保生、杉本邦子、大塚豊子編 近代文学研究所 昭和50年 2月
- ⑱『歴史小説抄』 前川清太郎、佐野正巳編 芦書房 昭和51年 4月
- ⑲近代日本文学 6 『森鷗外集』（二） 筑摩書房 昭和51年 8月
- ⑳筑摩現代日本文学大系 4 『森 鷗外集』「人と文学」唐木順三 筑摩書房 昭和51年11月
- ㉑『ザ・鷗外』－森鷗外全小説全一冊 第三書館 昭和60年 5月
- ㉒愛と青春の名作集『雁・うたかたの記』 作品解説：長谷川 泉 旺文社 平成 9年 4月  
《児童向け》 以下は、いずれも少年少女向けの本の中に収録されている。
- 〈1〉少年のための純文学選『高瀬舟』 桜井書店 昭和24年12月
- 〈2〉中学生文学全集 3 吉田精一編 安井夫人 問題／鑑賞 新紀元社 昭和31年 5月
- 〈3〉少年少女現代日本文学全集 1『森鷗外名作集』 偕成社 昭和38年12月  
森鷗外の人と文学：吉田精一 作品の読み方、味わい方：滑川道夫・斎藤喜門
- 〈4〉ジュニア版日本文学名作選 14 『山椒大夫・高瀬舟』

- 解説：荒 正人 偕成社 昭和41年 2月  
 × 以上2冊は、結びの「小太郎の二男三郎が立てた」を「小太郎の二郎三郎が立てた」と誤植。
- 〈5〉ジュニア文学名作選『山椒太夫・高瀬舟』解説：塩田良平 ポプラ社 昭和46年 4月  
 〈6〉日本の文学7『高瀬舟・山椒大夫』 金の星社 昭和48年12月
- 《文庫本》 文庫本では、物語の後に置かれている「附録」が割愛されているものが多い。
- (1) 岩波文庫『護持院原の敵討一他二篇一』 岩波書店 昭和 8年 7月  
 \* その後の増刷の際に「解説」が加わっている。解説：田宮虎彦
- (2) 創元文庫『高瀬舟 他』 解説：野田宇太郎 創元社 昭和27年 9月  
 (3) 市民文庫『森 鷗外集』 中野重治編 解説：中野重治 河出書房 昭和28年 2月  
 (4) 河出文庫『舞姫・文づかい』 解説：中野重治 河出書房 昭和30年 9月  
 (5) 旺文社文庫『舞姫・山椒大夫 他四編』 解説：長谷川 泉 旺文社 昭和41年11月  
 (6) 正進社名作文庫1『高瀬舟・寒山拾得 山椒大夫・阿部一族・安井夫人・羽島千尋』  
 解説：森 類 正進社 昭和45年 7月
- (7) 講談社文庫『阿部一族 山椒大夫 高瀬舟 ほか八編』  
 解説：小堀桂一郎 講談社 昭和47年 3月
- (8) ちくま文庫『日本文学全集』025『森 鷗外』解説：安野光雅 筑摩書房 平成 4年 2月  
 × 最後尾にある刊行年月「大正三年三月」は「大正三年四月」とあるべきところ。
- (9) ちくま文庫『森鷗外全集』5「山椒大夫 高瀬舟」解説：田中美代子  
 \* 「附録」の漢文にふりがな付きで読み下しあり。 筑摩書房 平成 7年10月
- (10) 風呂で読む文庫39『高瀬舟・舞姫』 フロンティアニセン 平成16年12月  
 (11) ちくま文庫『日本文学全集』017『森 鷗外』解説：安野光雅 筑摩書房 平成20年 6月  
 × 最後尾にある刊行年月「大正三年三月」は「大正三年四月」とあるべきところ。
- (12) PHP 文庫『鷗外の「武士道」小説』 解説：長尾 剛 PHP 研究所 平成21年12月  
 《外国語訳》 『安井夫人』を外国語に訳したものもある。

【英訳】したもの『鷗外』第11号（森鷗外記念会，昭和47年7月）に載っている。訳者は、その他にも日本文学の翻訳を手掛けているディビッド・ディルワース(David A. Dilworth)、トーマス・ライマー(J. Thomas Rimer)の2人である。

【スペイン語訳】もある。上智大学外国語学部イスパニア語学科の GALLEGO ELENA(ガジェゴ エレーナ)准教授の手によって、『安井夫人』や『高瀬舟』など、森 鷗外の短編6作品がスペイン語に翻訳され、2000年(平成12年)4月に出版されている。

～．．．～．．．

《電子媒体で》 印刷された本だけでなく、最近はこのメディアでも読むことができる。

著者の没後50年を経過して著作権が切れた作品を、インターネットに載せたものがある。

【青空文庫】というサイトがそれであるが、『安井夫人』もその一つに入っており、URLは <http://www.aozora.gr.jp/cards/000129/card696.html>。同様の趣旨の【梅雨空文庫】、【縦書き『北沢文庫』】にも入っている。また、「日本ペンクラブ」の【電子文芸館】にも収録されている。 <http://www.japanpen.or.jp/e-bungeikan/guest/novel/moriougai02.html>

《電子辞書への搭載》

近年、電子辞書の普及は目覚ましく、『国語辞典』『英和辞典』類はもちろん、上級機になると100種あるいはそれ以上もの多様で多彩なコンテンツが収録されているものも珍しくない。

中には音声で朗読が聴けるようになっているものがある(例：CASIOのXD-A10000型)。

また音声による朗読付きの作品もある他に、音声はないものの、日本文学や世界文学の名作・

代表作と言われるものを多数収めて、文字によって読めるようにしたものがある。例えばCASIOのXD-D10000型には日本文学と世界文学がそれぞれ1000種収録されている。そのうち鷗外の作品は24種入っており、その中の1つとして『安井夫人』も収められている。

### 3. 『安井夫人』に関する研究論文・論考

では、『安井夫人』はこれまでどのように研究され、どう分析し考察されているのだろうか。

《研究論文類》まず『安井夫人』そのものを考察の対象にした研究論文類を挙げる。

なお、近年、大学の紀要などに掲載された論文の中には、インターネット上に載せて誰でも容易にアクセスして読めるようにリポジトリ(repository)としたものがある。

1. 稲垣達郎 『安井夫人』について—歴史其儘と歴史離れ—  
『文学』14巻12号 岩波書店 昭和21年12月
2. 稲垣達郎 森鷗外の歴史文学—「安井夫人」ノート  
『早稲田商学』88号 早稲田大学商学同攻会 昭和25年9月
3. 稲垣達郎 『安井夫人』ノート 関西大学『国文学』4号 昭和26年6月  
\* 以上3編は(日本文学研究資料叢書『森鷗外I』(有精堂, 昭和45年1月)と,  
『森鷗外の歴史小説』(岩波書店, 平成元年4月)に収録。
4. 分銅淳作 安井夫人 『国文学言語と文芸』23号 昭和37年7月
5. 清田文武 鷗外の歴史小説における人間像の形成—「待つ」「耐える」という  
契機を中心に— 日本文芸研究会『文芸研究』64集 昭和45年6月
6. 板垣公一 鷗外「安井夫人」論—希求的行動者と傍観的認識者  
『名城大学人文紀要』14号 名城大学人文研究会編 昭和48年10月  
\* 後に『森鷗外』その歴史小説の世界(中部日本教育文化会, 昭和50年6月)に収録。
7. 船越 栄 鷗外の『安井夫人』—「歴史其儘」から「歴史離れ」への問題  
『文化』東北大学文学会編 昭和48年10月
8. 山崎一穎 「大正三年の鷗外」 『評言と構想』3集 昭和50年10月
9. 河村三佐子 『安井夫人』(学生レポート) 剣持武彦「評」を付す。  
『解釈』23ノ7 昭和52年7月
10. 蒲生芳郎 『安井夫人』について  
「現代国語」編集委員会『森鷗外』(作家・作品シリーズ4) 東京書籍 昭和54年4月
11. 山崎國紀 <特集> 新視点による作品論『安井夫人』—超俗への意志—  
『国文学』解釈と鑑賞 森鷗外—その小説世界— 至文堂 昭和55年7月
12. 津田洋行 『安井夫人』論—その「歴史離れ」の意味するもの—  
『明治大学文学部紀要 文芸研究』45号 昭和56年3月
13. 浦部重雄 『安井夫人』と『安井息軒先生』  
『信州白樺』森鷗外特集 第41・42合併号 昭和56年4月
14. 浦部重雄 『お佐代さん』考 『愛知淑徳大学国語国文』6号 昭和58年1月
15. 栗坪良樹 「安井夫人」—主観的な意見二, 三—  
(『国文学』解釈と鑑賞 臨時増刊号) 森鷗外の断層的撮影像 至文堂 昭和59年1月
16. 金子幸代 森鷗外『安井夫人』論—〈新しき女〉とモンナ・ワナ  
『文教大学国文』15号 昭和61年3月

- \* 後に『鷗外と〈女性〉—森鷗外論究—(大東出版社, 平成4年11月)に収録。
17. 小林幸夫 〈お佐代さん〉の正体—『安井夫人』論—  
『日本近代文学』第37集 昭和62年10月
18. 平岡敏夫 遠い遠いところ—鷗外の女性像と芥川の女性像  
『森鷗外研究』2 和泉書院 昭和63年5月  
\* 後に『森鷗外』不遇への共感(おうふう, 平成12年4月)に収録。
19. 金子幸代 『新しき女』たちの台頭—日独における女性解放と森鷗外—  
『社会文学』2号 昭和63年7月
20. 山崎國紀 『森鷗外の歴史小説』 岩波書店 平成元年4月  
第2章 鷗外・歴史小説の創作方法 第2節 『安井夫人』
21. 助川徳是 『安井夫人』雑考 『森鷗外研究』3 和泉書院 平成元年12月
22. 木谷喜美枝 「安井夫人」 『国文学』解釈と鑑賞 特集 森鷗外の世界  
至文堂 平成4年11月
23. 大石直記 〈解放思想〉の枠組みを脱して—モダニティをめぐる鷗外・らいてうの思想的接面—  
『日本近代文学』第51集 近代文学会 平成6年10月
24. 山崎國紀 『安井夫人』再考—「サフラン」『毫光』との検討  
『森鷗外研究』6 和泉書院 平成7年8月
25. 中野新治 鷗外「安井夫人」論—『遠い, 遠い所に注がれてゐる視線』  
をめぐって— 『日本文学研究』31号 梅光学院大学 平成8年1月
26. 中島国彦 「お佐代さんは」が手に入れたもの—『安井夫人』の表現構造—  
『森鷗外研究』7 和泉書院 平成9年12月
27. 田中司郎 小説「安井夫人」について 『薩摩路』14号  
鹿児島大学法文学部国語国文学会 平成16年3月
28. 喜久村 芽 「安井夫人」「ぢいさんばあさん」にみる歴史小説の妻  
第15回〔成蹊大学文学部〕日本文学科研究奨励賞(櫻賞)発表・佳作要旨 平成17年3月
29. 日塔美代子 森鷗外『安井夫人』小考—佐代のイメージ 『立命館文学』592号  
立命館大学人文学会編 平成18年2月
30. 前田角蔵 森鷗外『安井夫人』小考 宮崎大学『地域文化研究』Vol.1 平成18年3月
31. 伊藤佐枝 <紅一点>の物語に於ける選ばれること/選ぶこと  
—志賀直哉『赤西蠣太』, 森鷗外『安井夫人』, 島崎藤村『破戒』に即して  
『都大論究』43号 東京都立大学国語国文学会 平成18年6月
32. 勝倉壽一 「安井夫人」の問題—「歴史其儘」の苦悩—  
福島大学『人間発達文化学類論集』5 平成19年6月  
\* 後に『歴史小説の空間』鷗外小説とその流れ(和泉書院, 平成20年3月)に収録。
33. 清田文武 森鷗外「安井夫人」論 『比較文学』52号 日本比較文学会 平成22年3月
34. 須田喜代次 「繭を破つて出た蛾」としての「お佐代さん」  
—「安井夫人」を書く鷗外 『大妻国文』42号 平成23年3月  
なお, 外国(韓国)の日本近代文学研究者による論考もある。
35. 柳鎮雨 「森鷗外の『安井夫人』論」 韓国日語日文学会編『日言日文学会研究』第33巻  
東南保健大学観光日言通訳科助教授(日本近代文学専攻) 1998年(平成10)12月

## 《研究書類》

1. 斎藤茂吉 「鷗外の歴史小説」 『文学』4巻6号 岩波書店 昭和11年6月  
\* 後に『斎藤茂吉全集』第24巻(岩波書店, 昭和50年9月)に収録。

2. 唐木順三 『鷗外の精神』 一, 鷗外精神史 二, 歴史を超えるもの  
『安井夫人』から『寒山拾得』まで 筑摩書房 昭和18年 9月  
\* 「筑摩書房創業 30 周年記念出版」として再版。昭和45年9月
3. 日本文学研究資料刊行会編『森鷗外 I』(日本文学研究資料叢書)  
\* 稲垣達郎の上述の論文 3 編を収録する。 有精堂 昭和45年 1月
4. 山崎正和 『鷗外一闘う家長』 III 勤勉なる傍観者  
\* 後に新潮文庫(昭和 55 年 7 月)に入る。 河出書房新社 昭和47年11月
5. 岡保生・杉本邦子・大塚豊子編『日本近代文学』 安井夫人 / 森鷗外  
近代文化研究所 昭和50年 2月
6. 板垣公一 『森 鷗外—その歴史小説の世界—』序章 鷗外歴史小説序説 『安井夫人』  
第 8 章 鷗外「安井夫人」論—希求的行動者と傍観的認識者  
中部日本教育文化会 昭和50年 6月
7. 斎藤茂吉 『斎藤茂吉全集』第 24 卷 鷗外の歴史小説 岩波書店 昭和50年 9月
8. 竹盛天雄他『シンポジウム日本文学⑬ 森 鷗外』  
「鷗外と大正」 竹盛天雄・小堀桂一郎・磯貝英夫・平川祐弘・三好行雄  
学生社 昭和52年 2月
9. 吉野俊彦 『権威への反抗 森 鷗外』  
第 12 章 鷗外のマドンナ—『安井夫人』 PHP 研究所 昭和54年 8月
10. 尾形 侑 『鷗外の歴史小説』～史料と方法～ 筑摩書房 昭和54年12月
11. 長嶺 宏 『逍遥・鷗外論考』 歴史小説から史伝へ 風間書房 昭和60年 8月
12. 吉野俊彦 『鷗外百話』 II 日本はまだ普請中  
第 30 話 森鷗外『安井夫人』 徳間書店 昭和61年11月
13. 加藤富一 『近代文学の女人像』 お佐代(安井夫人) 近代文芸社 昭和61年12月
14. 山崎國紀 『森鷗外—基層的論究』 第 7 部 歴史小説への視点  
第 2 章 『安井夫人』—超俗への意志 八木書店 平成 元年 3月
15. 稲垣達郎 『森鷗外の歴史小説』 あとがき: 竹盛天雄 岩波書店 平成 元年 4月
16. 金子幸代 『鷗外と〈女性〉—森鷗外論究—』 大東出版社 平成 4年11月  
III 小説の中の女性像 第二章 歴史小説のヒロイン・『安井夫人』—〈新しい女〉とモンナ・ワッナー 第三章 母性原理を越えて—歴史小説・史伝の中の女性像— 二『安井夫人』の佐代
17. 山崎國紀 『鷗外—成熟の時代』 『安井夫人』再考—「サフラン」『毫光』との検討  
和泉書院 平成 9年 1月
18. 平川祐弘他『講座 森鷗外』2 『鷗外の作品』 「歴史と小説」—鷗外史伝の始動を  
めぐって 蒲生芳郎 新曜社 平成 9年 5月
19. 川田国芳 『鷗外の描いた女たち』 (四) 献身耐忍の愛  
①『安井夫人』—佐代— 私家版 平成11年12月
20. 平岡敏夫 『森 鷗外 不遇への共感』  
III 小説と史伝「安井夫人」—鷗外・芥川の女性像 おうふう 平成12年 4月
21. 金子幸代編・解説『鷗外女性論集』 不二出版 平成17年 4月
22. 勝倉壽一 『歴史小説の空間—鷗外小説とその流れ—』 和泉書院 平成20年 3月  
第 2 章 森鷗外の歴史小説 「安井夫人」の問題—「歴史其儘」の苦悩
23. 大石直記 『鷗外・漱石—ラディカリズムの起源—』 <解放思想>の枠組みを脱して—  
モダニティをめぐる鷗外・らいてうの思想的接面 春風社 平成21年 3月

《解説など》 前項の《研究書 類》との区別が難しい面もあるが…。

1. 長谷川敏平 『山椒大夫と森鷗外』 四 森鷗外その生涯と作品(二)  
『安井夫人』と『ぢいさんばあさん』 学友社 昭和23年 6月
2. 稲垣達郎 『森鷗外』 第一 序論 一 鷗外の生涯 7 文壇再帰  
第二 本編 一三 安井夫人 学燈社 昭和30年12月
3. 渋谷 暁 『森鷗外』 作家と作品 筑摩書房 昭和39年 8月
4. 唐木順三編 『森鷗外の人と作品』 晩盛期 学習研究社 昭和39年 9月
5. 野田宇太郎 『日本文学の旅』 12 西日本文学散歩 飢肥と清武 人物往来社 昭和42年 6月
6. 稲垣達郎編 『森鷗外必携』 日本文学必携シリーズ 6 学燈社 昭和43年 2月
7. 紅野敏郎他 『大正の文学』 有斐閣選書 近代文学史 2  
「森鷗外」のうち「歴史離れ」の行程—『安井夫人』 有斐閣 昭和47年 9月
8. 小堀桂一郎 「解説」鷗外の創作(五) 『鷗外選集』 第5巻 筑摩書房 昭和54年 3月
9. 長谷川泉他 『一冊の講座 森鷗外』 日本の近代文学 6 有精堂 昭和59年 2月
10. 竹盛天雄他 『新潮日本文学アルバム 1 森鷗外』 新潮社 昭和60年 2月
11. 山崎一穎 『Spirit 森鷗外』 ~作家と作品~ 有精堂 昭和60年 6月
12. 近代作家用語研究会編 『作家用語索引 森鷗外』 第4巻 教育社 昭和60年10月
13. 竹盛天雄編 『森鷗外必携』 別冊 国文学 No37 学燈社 平成 元年10月
14. 山崎國紀 『鷗外 森林太郎』 人文書院 平成 4年12月
15. 中野新治 「安井夫人」 『国文学』 解釈と教材の研究  
—森鷗外を読むための研究事典— 学燈社 平成10年 1月
16. 山崎一穎 『森鷗外 明治人の生き方』 「女性の発見」 筑摩書房 平成12年 3月
17. 上田 博編 『大正の結婚小説』 「安井夫人」 日塔美代子 おうふう 平成17年 9月
18. 高田瑞穂 『新釈 現代文』 (ちくま学芸文庫) 後記にかえて  
2 近代文学の何を読むか (5) 「安井夫人」 筑摩書房 平成21年 6月
19. 渡辺澄子編 『大正の名著』 一 浪漫の光芒と彷徨—  
「安井夫人」 渡辺澄子 自由国民社 平成21年 9月

#### 4. 『安井夫人』 関連の情報

次に、この小説『安井夫人』の学校教科書への採録状況、朗読された例、安井夫人その人の生き方に言及した本や、ブログ、等々、関連する情報を、知り得た範囲で挙げていく。

おそらく実際には相当な数にのぼるであろうし、以下に挙げるのは「九牛の一毛」にすぎないはずで、そのすべてを網羅することは到底一人でなしうる作業とは思えない。

が、見方によっては、実はその広がりこそがこの小説が人々にどう読まれ、どう受け止められてきたかを端的に示す“証し”と見ることもできよう(注11)。

《教科書への採録》 旧制中学・女学校、戦後の中学・高校教科書に採録された例を見よう。

私の手近にあるものでは、吉田弥平編『中学国文教科書』巻1(東京 光風館書店、昭和5年1月修正19版)に「九 安井息軒 森林太郎」として、『安井夫人』が7ページにわたって載っている。巻頭の「例言」には「本書は中学校国語科の購読用教科書として編纂したものです。全巻を通じて現代文を中心とし、なほ生徒の学力に応じて各時代を代表する文学を併せ採りました」とある。この教科書の初版発行は明治39年10月だから、大正3年4月に『安井夫人』

が発表されて以降、その後の改定の際に採録されたものである。

国語教科書に載った教材を通覧し、その特徴や傾向を分析した「定番教材の誕生」(野中 潤, 筑摩書房 Web サイト)によると、戦前、鷗外の作品で最も多く採録されたのは『山椒太夫』でのべ95回、『高瀬舟』が85回、『乃木将軍』(詩)59回、『曾我兄弟』(戯曲)56回、それに次いで『安井夫人』43回、『即興詩人』(翻訳)29回などとなっているという。その URL は次の通り。

<http://www.chikumashobo.co.jp/kyoukasho/tsuushin/rensai/teiban-kyouzai/002-03.html>

橋本暢夫『中等学校国語科教材史研究』(溪水社, 平成14年7月)には、坪内逍遙・徳富蘆花・島崎藤村・夏目漱石・森 鷗外・芥川龍之介・寺田寅彦の作品が掲載された旧制中学校や女学校の国語教科書について詳細に調査され、一覧表にして各作品の具体的な採録部分なども挙げられている。そして「鷗外作品の初採録といった面からみていくと、「高瀬舟」「安井夫人」「曾我兄弟」が大正12年に、「寒山拾得」「木霊」が大正13年に、「山椒大夫」が大正15年に、中等教材として採りあげられ、以後、昭和戦前期にかけて定着していった」のだという。

また同書によると、鷗外の作品では「昭和戦後期においては、その第1期に当たる1950年代の高等学校教材では、「安井夫人」「寒山拾得」が中心を占めていた」という。

東京書籍の附設教科書図書館「東書文庫」<http://www.tosho-bunko.jp/search/>を検索すると、戦後、中学校用では2社3種の国語教科書に採録されていることがわかる。(注12)

山本有三編集	『中学国語』3	日本書籍	昭和37年
佐藤春夫監修	『中学国語』3	大阪書籍	昭和37年
高木市之助等著	『中学国語』3	大阪書籍	昭和41年

また、高校では、次の例がある。これは割愛なしの全文収録という極めて珍しい例である。

『高等学校 国語 I』	右文書院	昭和48年
『高等学校 国語 I』	右文書院	昭和59年

学校教科書は生徒にとっては必ず学習するものであり、文学教材として採られた作品などは印象に残ることが多いであろう。

岩波書店で長年『漱石全集』の編集に携わった秋山 豊は、『漱石の森を歩く』(トランスビュー, 平成20年3月)で、中学校の教科書で『安井夫人』を読んだことを述懐している。

《授業実践用》全国の各学校での実践例は非常に多かろうと思われるが、管見では次の通り。

1. 西尾 実 『安井夫人』研究 謄写版 東筑・西南部支会 (年月日記載なし) (注13)
2. 宮澤林直 (都立板橋高校教諭) 教授上の問題点 「安井夫人」

『国文学』解釈と教材の研究 特集 森 鷗外の総合探求 学燈社 昭和31年9月

3. 上坂信男 (関東学院商工高校教諭) 教授上の問題点 鷗外の歴史小説の転機—

「安井夫人」「高瀬舟」「寒山拾得」に関連して—

『国文学』解釈と教材の研究 特集 森 鷗外の総合探求 学燈社 昭和31年9月

《大学の入試問題として》

私自身が大学受験生であった昭和40年前後に、『安井夫人』が大学の国語の入試問題として出題されたことがあった。過去に出題された問題のデータベースを持っている大手予備校や受験雑誌の出版社など数社に聞いた限りでは、近年は出題された例はないようである。

関連して、現代文の受験参考書として定評のあった高田瑞穂『新釈 現代文』(新塔社, 昭和34年9月初版)は、重版の際「近代文学の何を読むか」が加えられ15の短編が推奨されているが、その中に『安井夫人』も挙げられている。現在、ちくま学芸文庫で見ることができる。

～・～・～・～

### 《朗読作品として》

文学作品は俳優や演劇人などによる朗読が、以前はカセットテープで、近年はCDで数多く提供されているが、私の知る限りでは、アポロン音楽工業の〈カセットテープ現代作家風土記シリーズ〉『森 鷗外』の中で、女優・市原悦子によって『舞姫』『渋江抽斎』『阿部一族』などとともに『安井夫人』も、その一部が朗読されているのが数少ない例ではないかと思われる。

【朗読の配信】 教科書の出版もしている右文書院には『声の図書館』という文学作品の朗読を配信するサイトがある。携帯電話で聴くことができるシステムで、収録の対象になっているのは戦後の国語教科書を中心に選び出した馴染み深い作品や古典、童話などからなり、これまでに 500 点を超える作品が揃っている。『安井夫人』も声優の徳弘夏生(とくひろなつお)の朗読が入っている。<http://koetosho.com/reading/mobile/view000000.do>

平成 24 年 10 月 22 日時点での、前の週によく聴かれた「週刊ランキング」の統計によると、1 位は太宰治『グッドバイ』、2 位に大阪圭吉『あやつり裁判』、続いて鷗外作品が 2 点、3 位に『普請中』、そして『安井夫人』が 4 位にランクインしている。そのあと 5 位に夏目漱石『こころ』、さらに芥川龍之介が 3 点、6 位『羅生門』、7 位『鼻』、8 位『戯作三昧』と続いて、9 位が横光利一『旅愁』で、10 位が尾崎紅葉『金色夜叉』の順になっている。

【朗読番組】 放送では、NHKと民放の宮崎放送で取り上げられて紹介されたことがある。

NHKには、九州・沖縄管内を対象にした「南の文芸館」というラジオの朗読番組があった(平成 19 年 4 月～23 年 3 月)。九州・沖縄 8 県に縁のある作家の作品やそこを舞台にした作品を、各局のアナウンサーが持ち回りで朗読して紹介するもので、平成 20 年 3 月 16 日(日)夜、10 時 15 分～55 分の 40 分間、NHK 宮崎放送局の 3 人のアナウンサー(伊藤 航・細田史雄・藤澤義貴)が読み継ぐ形で九州・沖縄管内に放送された。ただし、放送時間の関係で一部を割愛しての放送であったが、主要な流れは損なわないよう配慮して構成されていた。

民放の宮崎放送(MRT)では女性パーソナリティーの語りで「ラジオ文学館」を放送していた(平成 20 年 10 月～平成 24 年 3 月。各回 15 分)。平成 21 年 11 月 29 日(日)には木佐貫ひとみ朗読で『安井夫人』を抜粋で紹介した。インターネット上に同番組の「過去の放送内容」がある。<http://mrt.jp/radio/bungakukan/?contents=200910-12>

～・～・～・～

### 《言及のある本》

- |                             |                           |          |          |
|-----------------------------|---------------------------|----------|----------|
| 1. 三重県教育会『三重婦女読本』           | 安井夫人                      | 三重県教育会   | 昭和14年 7月 |
| 2. 小松摂郎『劣等感』第二部             | 組曲ふうに 安井夫人                | 新読書社出版部  | 昭和34年12月 |
| 3. 東京都医師会『東京都医師会雑誌』第 218 号  | 安井夫人                      | 東京都医師会   | 昭和46年 9月 |
| 4. 扇谷正造『今なぜ政宗か』—あすの男性像をさぐる— | 社会保険出版社                   | 昭和62年 9月 |          |
|                             | 第 3 部「忘れ得ぬ人々」 安井夫人—永遠を生きる |          |          |
| 5. 平嶋周次郎『卓上の虹—宮崎知ったかぶり—』    |                           |          |          |
|                             | 4 の扉 素顔のみやざき人(安井夫人の現実)    | 鉦脈社      | 平成10年 9月 |
| 6. 浦部晶夫「安井夫人」のこと            | 『図書』第 597 号               | 岩波書店     | 平成11年 1月 |
| 7. 西尾幹二・八木秀次『新・国民の油断』       | 第 7 章 男と女の幸せとは            |          |          |
|                             | 運命を静かに受け入れていく生き方          | PHP 研究所  | 平成17年 1月 |
| 8. 川村純一『文学にみる痘瘡』            |                           | 思文閣出版    | 平成18年11月 |

9. 谷沢永一 『名言の力』 「智者」 PHP 研究所 平成21年 6月  
 ～・～・～・～

《ブログ類》「Yahoo!」や「Google」などの検索エンジンで「森 鷗外」「安井夫人」というキーワードで検索すれば多数ヒットする。私が読んだ中で、主なものを挙げる。

1. 「言語空間批評」楽書快評 0083 「安井夫人」森 鷗外  
<http://www.geocities.jp/npowaro/raku-83.htm> (2005.7.4)
2. 「世は不可解なり」 鷗外の嫁取りの説「安井夫人」  
<http://ameblo.jp/kyo-yu/entry-10006589123.html> (2005.11.29) kyo-yu の投稿
3. 壺齋散人(引地博信)「日本語と日本文化」「日本文学覚書」森鷗外「安井夫人」女の生き方  
<http://japanese.hix05.com/Literature/Ogai/ogai07.yasuihujin.html> (2008?)
4. 株式会社 河野 Net 個人指導道場 「名作を読む」 森鷗外「安井夫人」を読む  
[http://sakubun.blog.ocn.ne.jp/blog/2009/07/post\\_56da.html](http://sakubun.blog.ocn.ne.jp/blog/2009/07/post_56da.html) (2009.7.10)
5. 「フリードリヒの日記」 「安井夫人」森 鷗外  
<http://blog.goo.ne.jp/niet439/e/a8fba7b0cf96173ac05ad37388d4f43b> (2010.6.21)
6. らんどくなんでもかんでも 2 「安井夫人」森 鷗外  
[http://blogs.yahoo.co.jp/no1685j\\_s\\_bach/archive/2011/06/30](http://blogs.yahoo.co.jp/no1685j_s_bach/archive/2011/06/30) (2011.6.30)
7. 読書の楽しみ 高田瑞穂「近代文学の何を読むか」(5) 森 鷗外「安井夫人」  
<http://blog.livedoor.jp/kuni674/archives/6964229.html> (2012.3.30)
8. 安井息軒の夫人『佐代』を描いた森鷗外の『安井夫人』  
<http://www.miyazakichan.com/hujin/> (年不明)

#### 《シナリオとして》

映画やテレビドラマを想定した『運命の波』～安井息軒先生一族～というシナリオが、wikiモバイル <http://www39.atwiki.jp/witaka/m/pages/13.html??guid=on> に「自作シナリオ集」として載っている。川添家に縁談を申し込むシーンその他が描かれているが、その使者は仲平の妹の美和という設定になっていたり、息軒が病床の父滄洲に「お体の具合はどげんでございますか？」と語りかけるなど（清武の方言なら「どげん」ではなく「どんげ」とあるべきところ）、『安井夫人』を原作と考えるなら、その設定や地元の方言の実態とは異なる記述になっている。

#### 《要約紹介として》

『安井夫人』のあらすじを要約しリライトした形で紹介したものが、雑誌『友愛』（全織同盟友愛編集部）昭和 27 年 10 月号（通巻 57 号）に「東西賢女伝」(1)として載っている。浅見 淵（絵：寺田政明）によって書かれたものである。

## 5 . 地元・宮崎県清武町では

最後に、安井息軒・佐代夫妻の出身地・宮崎県宮崎郡清武町(平成 22 年 3 月 23 日に宮崎市と合併)での関連事項を中心に、宮崎県での情報を挙げておきたい。

【安井息軒旧宅】 清武町中野にある。昭和 54 年に国指定の史跡となり、後に茅葺き屋根に復元された。その向かいには【きよたけ歴史館】があり、息軒をはじめ旧清武郷の先人たちに関する展示と説明がある。息軒は写真を一枚も撮っていないというが、座机の横に座った着物の肖像画が軸装にして掛かっている。『安井夫人』コーナーもあり、影絵と女優・竹下景子

の語りと朗読によってこの作品を紹介しており(7分間),お佐代さんの遺品の黒の着物も展示してある。入場無料で、休館日は毎週月曜(祝日の場合は開館し翌日が休館)と年末年始。

同じ敷地内の宮崎市の中心市街地を望む高台には、滄洲・息軒父子をはじめ、その門下生で『日向地誌』の著者・平部嶺南、など、旧清武郷の先人を祀る【先人廟】がある。またそのすぐ横には、町の婦人連絡協議会などの手によって、平成6年6月に【佐代夫人供養塔】が建てられた。その左に並んでいる円い白の大理石には「愛」のひと文字が刻まれている。

このあたりを会場として、毎年2月11日には「安井息軒梅まつり」が開催され、例年その頃には旧宅の庭にある息軒お手植えの梅が咲き始めており、春が近いことを感じさせている。

【佐代橋】 清武町の大字今泉字岡は、『安井夫人』にも出てくるが、お豊さん・お佐代さん姉妹が住んでいた集落で、息軒の姉・長倉の御新造が父の命を帯びて、川添家への使者としてここを訪ねる。おりしも雛祭りの頃で、手には出がけに切らせてきた桃の花を携えて…。

町の中心部を流れて日向灘に注ぐ清武川。その支流の岡川に新しい橋が昭和63年2月に完成し、お佐代さんにちなんで「佐代橋」と命名された。この橋は地元の人たちにとって生活に欠かせない道路となっており、きょうも多くの人たちが通勤や通学などにこの橋を渡っている。

なお、宮崎県文化文教・国際課発行の小冊子『宮崎県郷土先覚者エピソード集』の「安井息軒」の関連事項として、「佐代橋」のことが橋の銘盤の写真入りで紹介されている。

【『清武かるた』】 子供たちに楽しく遊びながらふるさと清武のことをよく知ってほしいと、安井息軒顕彰会の下におかれた「清武かるた制作委員会」が広く町内外に呼びかけ、3000句以上もの応募作の中から厳選して平成21年に作られた。読み札は、五・七・五の形式で、「お」＝「鷗外も 感服して書く『安井夫人』」という1枚がある他、息軒や滄洲、その薫陶を受けた人物など、清武町のことを知る上で欠かせない人物・歴史・文化・産業・特産物・風景・交通、…、等々に関する読み札・絵札各44枚があり、社会科教育の教材としての働きもしている。読み札の裏には各事項についての160字程度の簡潔な説明文があって、理解を助けている。

【講演会】 9月23日＝秋分の日は安井息軒の命日に当たる。安井息軒顕彰会が主催して、毎年、息軒に関連あるテーマで講演会を開催している。平成24年9月23日には梅光学院大学の中野新治教授(近代文学 梅光学院・院長)を招いて、清武町文化会館の「半九ホール」で「希望としての安井夫人」という演題で講演会を開催し、多くの町民・市民が耳を傾けた。

【観光バスの車内案内】 かつて宮崎は南国ムードの漂う観光地として全国から多くの観光客を集めていた。中でも青島や日南海岸はその代表的なルートであったが、宮崎交通の観光バスが清武町の近くを通る際、息軒とお佐代さんの縁談とその後の2人の活躍と献身ぶりを紹介するガイド嬢による説明があった。その原稿は、社長の岩切章太郎が自ら書いたものだった。岩切は、一高時代に先の安井小太郎(息軒夫妻の孫)から漢文を習ったという縁があった。

【『みやざき100冊の本』】 宮崎県立図書館発行『21世紀の子どもたちに伝える みやざき100冊の本』(同実行委員会編、平成7年11月)の巻末に付けられた「100冊の本 別巻」の、「県外の著名人が描いた宮崎」に、鷗外の『安井夫人』も挙げられている。

## お わ り に

以上、これまでに私が知り得た森 鷗外の短編小説『安井夫人』に関する文献や関連する事柄や情報を、分野別に分け、年代順に並べて概観してきた。

私がいちばん力を入れて取り組んでいるのは国語学(日本語学)・方言学であり、近代文学は専門の分野ではない。これまで気がつくたびにメモや収集を続けてきた情報を網羅したつもりだが、完璧は期し難い。が、これをたたき台としてさらに増補していけば、より充実したものになるであろう。この稿がそのための呼び水となり一石となるならば幸いである。

最後に、こういったものをまとめておこうと思った経緯について、触れておきたい。

安井息軒の生誕地でありその妻お佐代さんの出身地でもある宮崎県清武町は、私の生まれ故郷であり、そこで小・中・高校時代を過ごした。母校・清武小学校、清武中学校の校門の傍らには安井息軒の胸像が立っており、児童・生徒の登下校を毎日静かに見守っている。

また入学式や卒業式、始業式や終業式など学校生活の折々に、校長挨拶や担任の先生の話に、「清武が生んだ偉大な先人・安井息軒先生は…」という表現が必ずと言っていいほど登場し、その記憶が脳裏に刻まれていたことが根底にある。

お佐代さんのことは地元でも広く知られて今も敬愛されており、『安井夫人』にも描かれているあの嫁入りのときのエピソードをときおり祖母や母から聞いたこともあった。

また町内には、息軒の遺徳を讃えその志の継承と発展をめざす団体として「安井息軒顕彰会」があって、長年にわたって地道な活動を続けている。その会員からの熱心な懇話により、私もメンバーの1人として活動することになり、この分野や関連の情報、話題にいつそう関心を持ち、深く関わることにつながった。

それらの経験を通して、これまでに私が『安井夫人』に関して知り得た情報を一度整理して、可能な限り網羅的にまとめておきたいと思うようになったことが、今回のこの稿執筆の契機となっている。とは言うものの、不足していること、見落としていること、補充すべき事柄も少なくないだろう。大方のご教示や情報提供をいただくことができれば、大変幸いである。

～・～・～・～

来年＝平成26年(2014年)は、大正3年(1914年)に『安井夫人』が発表されてからちょうど100年になる。1世紀のときを隔てて、これを機に、息軒とお佐代さんの生き方の持つ意味を改めて見つめ直し、『安井夫人』の文学作品としての研究がさらに進められ深められることを期待したい。

## 注

(注1) 明治28年(1895年)1月の創刊から昭和3年(1928年)2月の終刊まで、全34巻531冊が発行された。政治・経済・時事・社会・科学・文化・芸術・文学・評論…等々、非常に多岐にわたる分野についての多様多彩な内容が含まれ、日本初の総合雑誌と言われる。

(注2) 稲垣達郎は『森鷗外の歴史小説』(岩波書店)の中で、「お佐代さんは、世にしばしばいわれるように、『洪江抽斎』の五百、『ぢいさんばあさん』のるん、『護持院ケ原の敵討』のりよなどと共に、典型的な、鷗外好みの女性である」と述べている。

また田中美代子も、「伝説と歴史の間に」(ちくま文庫『森鷗外全集』5の巻末の「解説」)の中で、「鷗外には、偉人あるいは奇人変人に寄添って生活する影の人物…主にその妻や情人に対して、特別な興味や関心があったようで、しばしばこれを小説の主人公にしている。「安井夫人」がそうであり、「百物語」の太郎、「じいさんばあさん」「相原品」などがそうである」と指摘している。

(注3) 東禅寺は慶長15年(1610年)、飢肥藩2代の藩主・伊東祐慶の創建で、伊東家の菩提寺。

- (注4) 安井小太郎(朴堂)は、息軒夫妻の長女・須磨子の長男=すなわち孫に当たる。当時 55 歳。旧制一高の教授で、漢学の世界では重鎮の一人であった。学習院、大東文化学院などでも教鞭を執った。著書に『日本儒学史』(富山房, 昭和 14 年) などがある。
- (注5) 後で挙げる⑧『森鷗外集』(筑摩書房, 昭和 39 年) や, (9)『森鷗外全集』5 (ちくま文庫, 平成 7 年) などには, この「附録」のほぼすべてにルビをふって読み下しが示してあり, 便利である。
- (注6) 『鷗外歴史文学集』第 3 巻 巻末の「解題」による。
- (注7) 助川徳是『安井夫人』雑考(『森鷗外研究』3, 平成元年) による。
- (注8) 注の位置は「後注」が圧倒的に多いが, 例えば『鷗外歴史文学集』は見開きページの左端におかれている(1 ページの 5 分の 4 が注という場合もある)。この方式だと巻末にある注をいちいちめくって確認しなくて済み, 読みの流れを中断する度合いが少なくて好都合である。旺文社文庫はさらに徹底していて, そのページの左端に注がある。
- (注9) 『鷗外歴史文学集』第 3 巻巻末の「編集付記」によると, 原文のルビは作品によって「総ルビ」から「ごくわずかなルビが付されている」ものまでまちまちだが、『安井夫人』は「かなり多くのルビが付されている」部類に属する, という。
- (注10) 『鷗外歴史文学集』第 3 巻 の「注」による。
- (注11) 鷗外の経歴や業績を年代順に紹介・解説するような場合, 大正 3 年には『安井夫人』も当然登場するが, そういった単なる年表的な記載は, ここでは対象としていない。
- (注12) なお, インターネットで検索できるのは戦後の小・中学校のものだけで, 高校や戦前の教科書などは蔵書にはあるがインターネットでの検索はできないという。
- (注13) 『西尾実国語教育全集』(教育出版, 昭和49年10月~53年9月)には収録されていない。

## “Yasui fujin” (Mrs. Yasui) by Mori Ohgai and related publications and papers

HIDAKA, Koichiro

### Abstract

“Yasui fujin” (Mrs. Yasui) is a short story written by Mori Ohgai in 1914. This paper attempts a general survey of the work, covering as many aspects as possible: its first appearance, its publication in the complete works of Ohgai, and in various pocket editions, studies relating to it by scholars of modern Japanese literature, its inclusion in Japanese school textbooks, and various other related matters, including the story’s setting in Kiyotake in Miyazaki Prefecture. It is to be hoped that this report will lead to further research into “Yasui fujin.”

【Key words】 Mori Ohgai, “Yasui fujin”, Publication, Studies, Related information